

2018年10月7日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「いかに幸いなことか」

聖書：詩編1：1～6

詩編の特徴は、神様を賛美する歌、また嘆きの歌である。特に嘆きは、自分の苦しみ、悲しみ、辛さを率直に神に訴えている。詩編はこの率直に神に訴えることの大切さを私たちに教えている。

1～3 節は、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人の「幸い」を言い表し、4～5 節は、神の言葉から遠ざかることの悲惨さを強烈な表現で語っている。詩編では多くの詩がこのような「光と闇」、「善と悪」、「幸せと不幸せ」、「救いと滅び」などで表すが、ただ安易に二つに分けてしまうのはどうなのか？ 人を「善人」と「悪人」に分けてしまえるものなのか。ここは、「水辺の木」(3 節)も「吹き飛ばされるもみ殻」(4 節)も、自分自身の在り様を映し出していると見る事が出来よう。誰かと比較して、自分は「水辺の木」だ、あの人は「もみ殻」に違いないなどと考えるのではなく、自分自身の中にこの両者があることを受けとめて行く必要がある。人は皆心の内に善と悪がさ迷うものである。

聖書の言う「幸い」という時、キリストが語られた山上の説教を思い起こす。「心の貧しい人々は、幸いである、…悲しむ人々は、幸いである、…柔和な人々は、幸いである、…義に飢え渴く人々は、幸いである、…憐れみ深い人々は、幸いである、…心の清い人々は、幸いである、…平和を実現する人々は、幸いである、…義のために迫害される人々は、幸いである…」。イエスの言う「幸い」は、私たちの願っている幸いとはかなりかけ離れていると言わざるを得ない。ここでの幸いとは何か？

福音書の中のイエスの歩みを思い返す時に、気づかされることであるが、イエスという方は常に、貧しい者と共に居られ、悲しむ人、柔和な人、義に飢え渴く人、心の清い人、平和を実現する人、義のために迫害される人…そのような人々と共に居られたのではなかったか。

今、この時にイエスはどこにおられるのか？ 私たちは、イエスが居られるところにいる者なのか？ イエスはどこに立っておられるのか？ そこに気づかされて行くことが、「いかに幸いなことか」となるように聖書は教えているのではないかと思う。(神谷)